

創刊
れいろう
60年THE INSTITUTE OF MORAL
SCIENCE10
平成29年心の生涯学習誌
れいろう

鉛筆艦船画家
すがのひろゆき
菅野泰紀

昭和57年(1982)生まれ。広島大学文学部を卒業後、名古屋大学大学院文学研究科に進学。平成19年、父・偉信氏が経営する(株)オリエンタルプロセスに入社。本業の傍ら、独学で絵を学び、鉛筆艦船画家として作品を制作。艦とゆかりのある神社に絵を奉納する活動を行う。今夏には靖國神社遊就館にて『肖像～海征く艦船たちの残影～』の特設展示会を開催した。現在、展示絵画をもとにした自身初の画集を制作中。大阪旭モラロジー事務所登録維持員。

撮影=能仁広之／構成=川崎朋子

菅野 鉛筆だけで描かれたとは思えない迫力と緻密さがあり、見入ってしまいました。波のうねりに合わせて船首が上向きと下向きの絵があり、構図の違いで港に戻ったかどうかを表現されていることには「なるほど」と思いましたね。特に印象深かったのは、艦船に人が描かれていることでした。

対談

今を生きる私たちの 「務め」とは



ジャーナリスト
ささゆきえ
笹 幸恵

昭和49年(1974)、神奈川県生まれ。大妻女子大学短期大学部卒業後、出版社勤務を経て平成13年に独立。ビジネス関係の取材執筆の傍ら、大東亜戦争に関する取材を始める。海外にある民間人建立慰靈碑や遺骨収集事業の問題点を雑誌に寄稿。著書に『女ひとり玉碎の島に行く』(文藝春秋)、『白紙召集で散る軍属たちのガダルカナル戦記』(新潮社)、『沖縄戦二十四歳の大隊長』(学研パブリッシング)など多数。

慰靈がつなぐ縁

——戦後七十二年がすぎ、戦争体験者が少なくなる中、笹さんはガダルカナル島をはじめ、先の大戦の激戦地である南方の島々を巡り、戦没者の慰靈や遺骨収集にも取り組まれています。

また、菅野さんは戦艦大和をはじめ、当時の艦船を鉛筆で描き、艦内に祀られたいた神社の分靈元に、その絵を奉納する活動をされています。靖國神社遊就館の特別企画として、奉納原画展を開催されました。笹さんは、艦船画を初めて目にされた時、どのように感じられましたか。

笹 鉛筆だけで描かれたとは思えない迫力と緻密さがあり、見入ってしまいました。波のうねりに合わせて船首

が上向きと下向きの絵があり、構図の違いで港に戻ったかどうかを表現していることには「なるほど」と思いましたね。特に印象深かったのは、艦船に人が描かれていることでした。

なんです。これは僕のこだわりで、艦船は人がいないと動かないからという理

〈特集〉 最高道徳実行のすすめ 図解で気づくモラロジーの魅力

宮下和大
望月文明
木下城康
江島顕一

太田哲也 (元レーシングドライバー)

〈対談〉
笹 幸恵 (ジャーナリスト)
菅野泰紀 (鉛筆艦船画家)

新連載 じいちゃん、ばあちゃんが先生!